

洞穴のある風景

津向町 大杉崎へ

七尾湾南湾沿岸に位置する津向町。鹿島郡誌によると、「津向」の地名は、古代の国津、香島津の地に向いていることに由来するという伝承がある。

大杉崎は津向町にあり、七尾湾南湾に突出した丘陵地の先端部である。この付近には、7世紀の横穴古墳が10基以上あったことが確認されている。横穴古墳は、昭和4年に操業した七尾セメント会社の敷地造成などにより、現在は残されていない。

七尾セメント会社は、昭和38年に吸収合併され、住友セメント七尾工場となった。工場には、石動山からセメントの原料が運び込まれ、高い鉄塔をつたうワイヤーに原料を載せた入れ物がぶら下がり、一日中滑車の回る音を響かせながら、道路や家並みの上を通っていた。地元の人々に親しまれ、能登最大といわれた



海水浴場に使われていた砂浜

工場は、昭和50年7月に閉鎖されるまで、多大な経済効果をもたらし、地域振興に貢献した。
また、七尾南湾と赤浦潟に挟まれた台地（通称「上野台地」）には津向町と松百町にまたがって、七尾城主畠山氏の出城の上野砦址もあった。

かつての海水浴場

大杉崎の近くにかつて、石川県立七尾高等女学校（現石川県立七尾高等学校）の水泳訓練の海水浴場になっていた砂浜があると聞いて、その場所を訪れてみた。

市道西湊138号線沿いにある入り口は少しわかりにくいですが、草をかき分けて入って

いくとすぐに、波の音が聞こえてきた。その音を頼りに海岸の方に進んでいくと、人が踏みならしたような道が現れ、海が見えてきた。遠浅で澄んだ海。切り立った崖から桜の木の枝が垂れ下がり、海面に浸かっている。対岸の能登島がすぐ近くに見える。

女学校に通っていた、市内に住む82歳の女性に話を聞くことができた。そのころは、当然今のようなカラフルな水着がない時代である。木綿の黒い水着を着て、海に入った。泳げない人は、浮き輪がないので、腰にさらしを巻きつけて、その端を先生が持ち、吊るされるように泳いだという。当時の学校は、現在の御祓中学校の場所であり、そこから海水浴場まで、笹が生い茂る道をかき分けるように一列になって歩いた。その頭上を、セメントの材料が運ばれてくるのを見上げていたそうである。

生徒たちは、お母さんや、おばあちゃんが縫ってくれた、簡単な（ワンピース）を着て、海まで歩いた。海にはウニがたくさんいて、足に刺さり痛かったが、水面がとても澄んでいたことを覚えていると話



国立七尾病院近くの見晴台からの眺望

お昼には、やぶを切り開いたところを休憩所にして持参したお弁当を食べたようで、とても楽しかったようである。

新しい景観

平成16年に、市道西湊138号線が全面供用開始してからは、今まで観ることができなかった景観を気軽に楽しめるようになった。津向町から松百町方面へ進んでいくと、長年の波による侵食で大きな口をあけたように削られた大立崎の洞穴が、波穏やかな海にオブジェのように置かれて

いるように見える。晴れた日には、青い海に白く映える能登島大橋、土・日曜日には、金沢大学ヨット部の学生が、白い帆をあげて練



大立崎の洞穴

習をしている。この様子は3月から11月まで見ることができ

る。新しく香津浦公園も整備され、ゆっくり景色を眺めることができる。この時期になると、防波堤沿いには、イイダコ釣りを楽しむ人々をよく見かける。



大立崎の洞穴

これからも七尾らしい景観を守り、残していきたいものである。

一方、通称「上野台地」にある国立七尾病院近くの見晴台からの眺望も素晴らしい。七尾湾に浮かぶ能登島と能登島大橋、海岸線沿いに並ぶように立つ石崎町の家並み、その向こうには、和倉温泉街とツインブリッジのとも見渡すことができる。市街地から、車でわずか数分のところで、庭園のような景色を見られることに驚きと感動を覚えた。

景色は、人が見て感じることで、初めて景観となる。新しく見る場所が整備されることで、これまで見られなかった景色が見えるようになることもある。見る場所を整備することも景観の維持には大切である。

DATA 松下集

(国立国会図書館所蔵)

招月庵正広の家集で3200首余りを収める。

正広は、室町時代の代表的歌人の正徹の直弟子で、招月庵を継承した。

文明12年(1480)、能登守護畠山義統の招きで能登に下向した正広は、9月4日に守護代遊佐統秀の誘いで津向を訪れ、和歌を詠んでいる。

